

## 日本語要旨一覧

雑誌名	Japan review : Journal of the International Research Center for Japanese Studies
巻	34
発行年	2019-12
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1368/00007499/">http://id.nii.ac.jp/1368/00007499/</a>

Gerald GROEMER

*A Retiree's Chat (Shin'ya meidan): The Recollections of the Kyōka Poet Hezutsu Tōsaku*

『莘野茗談』——狂歌師、平秩東作の回想記

1780年代末、高名な狂歌師の平秩東作<sup>へ ずつとうさく</sup>（1726–1789）は来し方を振り返り、印象に残る経験の数々やおのれの老境について書き綴った。こうして生れたのが随筆集『莘<sup>しん</sup>野茗<sup>や</sup>談<sup>めいだん</sup>』である。未完と言われるこの作品は、とくに昔の著名な作家、詩人、思想家、画家、歌舞伎の人気役者、吉原の粋人や花魁、地方の詩人や著作家、個人的友人、狡猾な僧侶、蝦夷地（北海道）の様子、都会生活の利点などについて、16の逸話にわたって作者の見解が述べられている。この話題の豊富さゆえに、18世紀末の狂歌師の珍しい伝記ばかりか、江戸の文化生活についての得難い個人的な話を垣間見ることができる。

【平秩東作、狂歌、江戸、歌舞伎、吉原、伊勢、蝦夷】

R. Keller KIMBROUGH

Pushing Filial Piety: *The Twenty-Four Filial Exemplars*

and an Osaka Publisher's "Beneficial Books for Women"

孝の押売——『二十四孝』と大阪の版元による「女訓書」

享保年間（1716–1736）、ただし1729年以前のある時、大阪の版元、渋川（柏原屋）清右衛門が中世の短編「御伽草子」23篇を『祝言御伽文庫』と題して箱入りで刊行し、「女性のための教訓書」と宣伝した。この23篇には、室町時代（1337–1573）後期から『二十四孝』として読み継がれてきた読物で、14世紀初め（元朝）の文人、郭居敬の書いた『全相二十四孝詩選』の邦訳も含まれている。同じ時期、1698年から1729年にかけて、渋川は女性のための教訓書、女訓書を6冊以上出したが、そのうち3冊は『二十四孝』から抜粋した絵入り本である。本稿は『女用文章綱目』（1698）、『女童子往来』（1715）、『女大学宝箱』（1716）を中心に、渋川版『御伽草子二十四孝』を考察する。そこから女性のための『二十四孝』について、渋川の思惑、また女訓書としての『二十四孝』を読んだ女性側の受け止め方という観点から、その意味を探る。

【渋川（柏原屋）清右衛門、『二十四孝』、『御伽草子』、『御伽文庫』、『女大学』、『女大学宝箱』、往来物、女訓書】

MIURA Takashi

The Filial Piety Mountain: Kanno Hachirō and The Three Teachings

孝行山——菅野八郎と三つの教え

本稿は福島の中農、菅野<sup>かんの</sup>八郎（1813–1888）の著作を吟味し、その世界観を理解するのに、「宗教」と「道徳」を二分しては有効性に限界があることを述べたい。菅野は「孝」という徳について多くの書を著し、この徳こそが儒教、神道、仏教の最高の理想だと主張した。そして「孝行山」という模式図を示し、儒教、神道、仏教が山頂に至る三つの道であるとした。本稿では近代における「宗教」カテゴリーの起源に着目した最近の研究を用いて、菅野の著作や「孝行山」のような概念には「宗教」と「道徳」の二分法が存在しないことを示す。「宗教」カテゴリーを前近代の資料に無批判に当てはめるのと同じく、「道徳」という近代のレンズや、「宗教」ならぬ「通俗道徳」を通じて菅野の著作に近づくと、その思想を過度にコンパートメント化することになる。本稿はアン・スウィドラーの「文化のレパートリー」モデルを通じて、異なるアプローチを試みる。

【孝、通俗道徳、宗教、文化のレパートリー、「孝行山」、農民、19世紀】

Ruselle MEADE

Juvenile Science and the Japanese Nation: *Shōnen'en* and the Cultivation of Scientific Subjects

少年の科学と日本国家——『少年園』と科学分野の育成

19世紀末、少年は日本国民を帝国臣民に変える試みの最重要ターゲットであり、著名な知識人たちが、この目標達成のためにマスメディアの影響強化の先頭に立った。本稿は日本初の本格的な少年雑誌『少年園』（1888–1895）と、科学を利用して行われた近代的な帝国臣民のアイデンティティ形成を検討する。明治中期、教育が道徳を軸とするものに切り換わると、科学教育は西洋からの移入物であり、天皇への忠誠を育てるのに有害だとして、政府はそれを学校教育の重点から外した。18世紀をつうじて科学的発見は知的にも物的にも優れた能力を必要とするものとみなされるようになったが、そうして形成された科学のイメージを使って、『少年園』は思春期の日本の若者に、自らを真実探求の英雄的な帝国の担い手と思わせる想像景を提供した。本稿は、日本の近代国際戦争以前に発刊されたこの雑誌を研究し、影響力のある出版物が近代的帝国臣民アイデンティティの形成に科学をいかに利用したかを示すことによって、明治中期の日本における科学の役割への理解を深め、日本の正式な帝国確立以前にこうした努力が払われていたことを示す。

【少年雑誌、明治時代、山県悌三郎、『少年園』、通俗科学、科学の大衆化、男性性、日清戦争、帝国主義】

ISSE Yōko

Revisiting Tsuda Sōkichi in Postwar Japan:

“Misunderstandings” and the Historical Facts of the *Kiki*

**戦後日本の津田左右吉を再考する——「誤解」、そして『記紀』の史実**

津田左右吉（1873–1961）は晩年に至って、『古事記』と『日本書紀』についての自分の研究に対する読者の「誤解」と対決した。それは戦前からの懸案でもあった。戦後になって、津田の『記紀』研究は新たに「歴史科学」と認識され、「歴史的事実や古代天皇の否定論者」として知られるようになった津田は、自分の研究に対する戦後の勝手な評価や誤った解釈に異を唱えた。だが津田の意図は、そのような評価とはかけ離れたところにあった。古代の天皇が歴史的に実在したかという問題に、津田は正面から関わるのをずっと避けてきた。戦後の学者たちは津田を「否定論者」とする集団的認識を形成し、「歴史的事実」という概念に関する津田の重要な発言を見ようとしなかった。津田は自分に「マルクス主義者」とレッテル貼りする戦後の傾向を嫌い、『記紀』の新解釈を批判した。戦後の学者は自分たちが作りあげた「想像上の津田」を根拠に、また考古学的発見に依拠して、皇室の伝統を抜きにした新しい国史を構築しようとしたのである。津田が皇室への「愛」を宣言したとき、彼を「マルクス主義者」とみなしてきた戦後の学者たちは驚き、その研究の全体像を理解しようと試みた。つまるところ、彼らは津田の学問を単純化しすぎた点で有罪である。

【『古事記』、『日本書紀』、歴史科学、解釈の共同体、発禁書、学問の自由、戦後の史学史、マルクス主義史学、文献学、歴史的想像、皇室】

Matthew LARKING

Death and the Prospects of Unification: *Nihonga's* Postwar Rapprochements with *Yōga*

死と統合の可能性——戦後の日本画と洋画の和解

1947年、須田国太郎（1891–1961）、中川一政（1893–1958）、石井柏亭（1882–1958）、木村荘八（1893–1958）の四人の洋画家が美術雑誌『三彩』に「日本画」についての見解を発表した。彼らがとった立場は、戦後初期に起きた「日本画滅亡論」における欧化論を先導することになった。本稿では「滅亡論」および様々な歴史問題や用語問題を紹介し、とくに戦後（20世紀半ば）の状況と、日本画が近代絵画のイデオロムとして登場した明治初期（1869–1912）との呼応関係について述べる。次いで、日本のモダニズム全般に日本画と洋画の分断が行き渡ったことを図式化し、戦後の日本画の死につながった1947年の四人の洋画家の発言について批判的に議論したい。そのあと締めくくりとして、これら欧化論が戦後初期の日本画家に加えた圧力について、それが20世紀半ばにおける日本画の沈滞に対し、芸術的に実りある解決をもたらしたことを述べる。

【「滅亡論」、絵画の死、欧化、戦後、須田国太郎、中川一政、石井柏亭、木村荘八】

Chun Wa CHAN

Fracturing Realities: Staging Buddhist Art in Domon Ken's Photobook *Murōji* (1954)

**砕け散る現実——土門拳の写真集『室生寺』（1954）で上演された仏教美術**

終戦直後という時代を背景に、写真家の土門拳（1909–1990）は仏教の至宝をとらえようと奈良県の室生寺へ旅立った。その成果として出版された写真集『室生寺』（1954）は、日本の仏教遺産を理想化して大量消費に供されたノスタルジックな光景と解釈されることが多い。しかしここに収められた画像と、写真集の中の配置をじっくり見ると、土門が手近な過去の再構築には無関心だったことが分かる。1950年代に禅が再生を遂げたのとは対照的に、土門の仕事は日本の「伝統」や精神の「粋」を証明しようとするいかなる政治的試みとも無縁だった。見る者はかつてない近さで仏像に迫ることが許されるが、土門による触感へのこだわりと縮尺の操作が、逆説的に仏像を分かりにくく疎遠なものにする。同じく重要なのは、クローズアップの分かりやすさと抽象性が並列されていることだ。これが過去をばらばらの断片に砕いていく。写真集『室生寺』はこのように、今日まで共振しつづける問題を提起する。つまり、戦後日本の文化においてドキュメンタリー写真の役割とは何かということ、また国家、文化的記憶、主観性という競合概念が折り合える隠喩の土台として、写真はいかに機能しうるのかという問題である。

【土門拳、写真集、ドキュメンタリー、リアリズム、戦後の写真、アヴァンギャルド、新即物主義、仏教、文化遺産、巡礼】